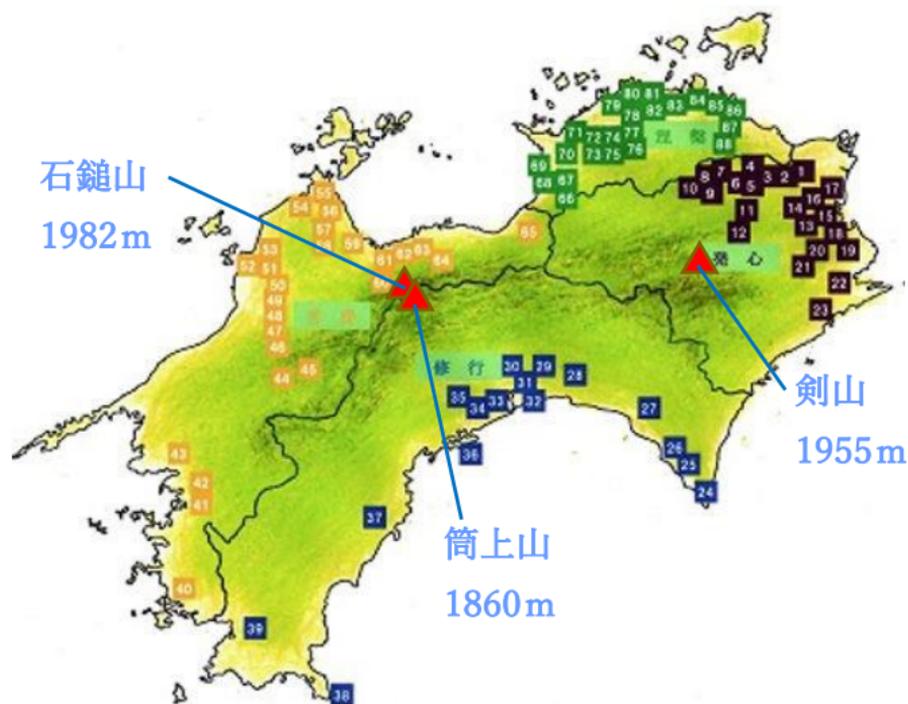


四国遍路・修験之道



大晦日の夜、修験仲間と二人で石鎚ロープウェイ乗り場に向かった。

ロープウェイ乗り場の京屋旅館の横に「禊(みそぎ)の滝」がある。

修験登山では、まず「禊の滝」で心身を清めて霊峰に登る。

寒い冬の夜中、裸になり、タオルを腰に巻いて、滝の中へと入ってゆく。

冬の滝の水は身を切るように冷たい。というか痛いー。

足を踏ん張り、腹を据え、思わず大声を出さずにはいられない。

滝に打たれながら不動明王の真言をひたすら唱える。

滝の水が肩から全身を禊ぐ。

数分後、滝の音が遠のき、頭の中が真っ白になり、体が有るのか無いのか、不思議な静けさが訪れる。

ゆっくりと呼吸を整え、滝から出て、

白衣に着替える。

しばらくすると、体がガタガタガタガタと震え出してきた。

内から揺さぶられるようで止めようにもどうしようもない震えである。

仲間の彼は、そばにある川の中に入り「禊」を行っていた。

大晦日から元旦にかけては、ロープウェイが中腹の成就社まで夜通し運航しているのを聞いていた。

ロープウェイに乗る頃には、体の震えもおさまり、今度は内よりぼかぼかと体が暖かくなって来ていた。

[成就社](#)に着いて新年の初詣で一。

午前2時、頭に鉢巻をまきヘッドライトをつけて、地下足袋に白衣に金剛杖、石鎚山頂を目指して、暗闇の山道を歩いて行った。

キリッとした夜の山の空気、登るにつ

れて山道の雪が増してゆく。

「夜明かし峠」に出た時、あたりは一面の白夜のようであった。

満月の光に照らされて、積もった雪が白く白く輝やっていた。

そこから山頂まではライトなしで登れる程、月のひかりと雪あかりに照らされた山道であった。

空がうっすらと明るくなって来る頃、石鎚山頂・弥山に到着した。

頂上社の仁・智・勇の御神像は、風雪にさらされて、雪をまとっていた。



夜明峠から見た石鎚山(下山時)

石鎚大神に祈りをささげ、初日の出を待つ。登山家が数人登って来ていたが二人だけが薄着の白衣姿であった。

薄闇の中、彼が持って来ていた「餅」を少しづつかじり震えながら日の出を待っていた。

天狗岳の向こうの空が明るくなり、群青の空に太陽が昇る。ついに来た！！

石鎚山頂での初日の出！！

一神々しい御来光に、手を合わせ、その光の生命にわが身を全託せん、と祈っていた。



弥山山頂の初日の出

ここから新しい年が始まる。

山を降りる頃には空は晴れ、明るい陽ざしが雪山をおおい、厳冬ながらさわやかな気持ちになっていた。ふと寒さを忘れてしまう時がある。

生きよ！生きよ！と生きる力が湧いてくる。新年、生まれ変わったような日であった。



成就社(下山時)

(これは 20 代半ばの体験です。今このような修行をすると、本当に死んでしまうかも……)

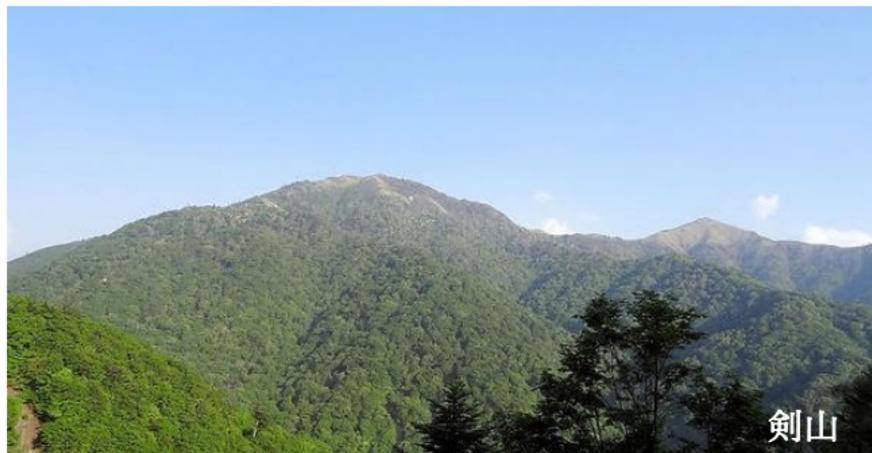
(関連) 動画⇒[石鎚山修験](#)

●嵐の禊・謎の霊峰―剣山修験

剣山(標高 1955m)には、遠くエルサレムから運ばれて来た「ユダヤの秘宝―神との契約の聖櫃（十戒の石板・アロンの杖・マナの壺）」が埋蔵されているという伝説がある。

実際に山頂付近を調査・掘削した先駆者は、その証拠を発見したと伝えている。

その秘宝が世に公表される時、日本民族の真の姿が明らかとなり、日本は世界文明の中心になるのだと言う。



剣山

四国八十八ヶ所霊場を開創した空海は、当時そのことを知っていて、剣山を回るように徳島の霊場を配置したという説もある。

また、剣山には仙人が住んでいた。

「剣山で、林霊峰さんと一緒に修行しましたよ…。」

高知で山籠もり修行をされていたG師は、その方のことを話してくれた。

仙人は、空中に浮かんだり、空間から必要なものを取り出していたともいう。



龍光寺役行者像

そんな話をしながら、修験仲間三人で
剣山に登った日があった。

剣山へは、見の越からリフトに乗れば
1時間ほどで登ることがができるが、その日は富士の池・龍光寺から登って行った。

一泊二日の予定で、行場を巡り、夜は山頂で「満月の瞑想（フルムーン・メディテーション）」をすることにしていた。

龍光寺は修験道の霊場である。



剣山大権現に参拝して、樹海の中へ入り「お花畑」のコースを登って行った。

深い森の中を進んでゆく。

途中で、急に雨が降り出す。

あたり一面に、白い霧が漂いはじめ、雨は次第に強くなって、行場に入る手前では、激しい風雨となっていた。

樹海の樹々は波立ち、道端の低木はバツサーバツサーと揺れ動き、山道には泥がはじけるようにして飛ぶ。

吹き荒れる嵐の中、

三人ともずぶぬれになって

ろっこんしょうじょう　ろっこんしょうじょう
「六根清浄！六根清浄！」

(六根とは目・耳・鼻・舌・身・意)

と叫びながら、声をかけ合って進んで行く。ただ前へ前へと進むしかない、

「一心」にならざるを得ない状況、まるで「天然の禊（みそぎ）」である。

行場に入ると、
大きな岩や樹林には白い霧が立ち込
め、神秘的な様相を醸していた。山霊
の息吹が漂い、目の前で霧が動く。
雨に打たれた草木の香りがする。
行場には、
両劔神社、三十五社、胎内くぐり、
蟻の塔わたり、古劔神社、
千筋の手水鉢、鶴の舞い、不動の岩屋
などがある。
その中のいくつかを巡って行く。



不動の岩屋の入口

不動の岩屋は洞窟になっていて、ライトをつけてハシゴを降りてゆくと底の方に水が流れている。

「伝説の秘宝」は、鶴の舞いの上か、頂上の宝蔵石の下か、鶴亀岩のあたりか…。

奇妙な岩を登ったり、小さな社に祈ったり、鎖をつたったりして、山頂へと向かっていった。

修験道では

「山河草木皆仏性…」といい、自然のすべてに仏性が宿っている、自然は神であり、吹きすさぶ嵐も如来の声と聴く。嵐の山中を二時間余り歩き続けていた。



宝蔵石

山頂の雲海荘にたどり着いた時には、
三人とも放心状態であった。

山頂で楽しみにしていた「満月の瞑
想」は出来なかったが、「天」の大洗
礼を受けた一日だった。

(行場巡りのすすめ：地図参照／剣山の行場はひ
っそりと静かで神秘的なところす。行場へはリ
フトコースからも行けます。剣神社に祈願してか
らリフトに乗ります。10の行場と山頂近くの宝
蔵石、鶴亀岩、大劔神社を巡れば、秘宝の謎の解
明に近づけるかも知れません。山頂からは
360° 四国山地の山々が見渡せます。)



(関連)

旅日記⇒ [○四国剣山のミステリー](#)

[○剣山の秘宝を伝える-高根資料館](#)

[○アークを見に行った](#)

● 神仙境の霊峰一筒上山修験

(旅日記「秘書・神仙道術篇」写真追加版)



四国は高知の神仙・宮地水位氏(1852～1904年)の事を知ったのは、20代の初期四国遍路の途上、土佐の山奥で山ごもり修行をされていたG師を訪ねた時だった。

霊峰石鎚山の南に連なる手箱山に、神仙界に通じる入口があるというのである。

宮地水位氏はそこから何度も「神仙界」に旅をし「異境備忘録」という書物を記している。

G師も手箱山で修行をしたと言われていた。その話を聞いてからは、私も何度か手箱山に登って修行をしたことがあった。



登山ルートは愛媛の土小屋からと高知の池川からの道とがあり、2ルートとも行って見たが、たいていは1泊2日(テント)の日程で登った。

G師によると手箱山の隣にそびえている筒上山の方がその霊域への入口であるという。

筒上山(標高1860m)の修験登山については話せば長くなる。

ある年の5月満月の日の修験は格別であった。



筒上山鎖場前の鳥居

毎年、5月の満月の夜には、ヒマラヤ山中のある秘所で「ウエサク祭」という祝祭が開催される。

その祭にはブッダやキリスト、多くの聖者が現れ、巡礼者たちを祝福し秘儀を授け、地球上のあらゆる生命の進化を鼓舞すると云われている。

そのウエサク祭の日に筒上山に登って見たかったのである。

ちなみに日本では、京都の鞍馬山(地球霊王サナートクメラを祀る)で毎年ウエサク祭が行われている。



筒上山 山頂

筒上山の山頂からのながめは 360° 全方位雄大な四国山地が見渡せる。

宮地水位氏が伝えている神仙界への入口とは？、神仙たちが音楽を奏で天女が舞い踊るといふ舞曲台は何処にあるのだろうか…。山頂あたりを散策していた。

天気は上々、石鎚山の向こうに夕日が沈むのと同時刻、手箱山から大きな満月が昇ってきた。その壮大な光景は筆舌に尽くしがたい。



手箱山の向こうから昇る満月 手前は舞曲台？

その日は山頂で満月に向かって瞑想し
一人夜を明かした。

一面の笹原が月明かりに照らされて、
時々吹く風に静かな音色を立てて揺れ
る。山頂で過ごす満月の夜は神秘的で
荘厳である。

ヒマラヤ・ウエサク祭の霊視は難しい
ことであったが、実際に何ともいえぬ
美しい静けさ…大自然のとてつもなく
大きな力がゆっくり、ゆっくりと、
瞬間、瞬間と、力強く山々を動かす。



筒上山頂 5月満月の夜

それがすべての生命を生かし輝かせているような不思議なバイブレーションを感じた夜であった。

宮地水位氏は 300 冊以上の書物を執筆されている。どれも秘伝を含む霊書と呼ばれ、一般には出回っていない。現在では、八幡書店から水位氏の一部秘蔵本と関連資料が発行されているが、明治時代に執筆されていることや神仙道の実践を伴う教えであるということから非常に難解である。



筒上山頂付近 ウエサク祭の瞑想

山のG師は、その宮地神仙道も修行されておられた。

そこには仙人の呼吸法や靈胎の創造、魂で旅をしたり靈的に然るべき用事を実施する方法などがあるという。

G師の話は、古神道、密教、修験、遍路、ヨガ、秘教、宇宙人、古代文明、預言、占い、社会情勢など話題が絶えず、祈禱による救済とっていいのか一人山の奥で修行生活を送られていた。



筒上山頂 大山祇神社

当時、私は遍路から帰り G 師を何度も尋ね教えを乞うていた。その頃は、愛媛からだと車で国道 32 号線、33 号線、194 号線、どれを通っても 5~6 時間はかかる高知の山奥である。

友が友を呼び 20 代の若者たちが G 師を訪ねていった。

それが今でも懐かしく、心の支えにもなっている。訪ねる度、この世の者ではないというような、非日常的でワクワクする感じに満たされていたのである。



筒上山 十三の社祠がある

そんなことを思い出し、先日、宮地水位氏の秘蔵資料はないものかと、今年オープンしたばかりの県立「オーテピア高知図書館」へ行ってみた。

高知の資料コーナーに水位氏の「神仙道術篇」や関連の資料が置かれていた。トキメキながら早速借りて来た。今は亡きG氏の教えを偲び、もう一度、じっくりと読んでみようと思っている。 2018.12.30



(関連) 動画⇒[筒上山修験](#)

資料⇒[手箱山伝説](#)